



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〔紹介〕北海道帝国大学の奉安所建物について
Author(s)	池上, 重康//解説
Citation	北海道大学大学文書館年報, 13, 62-65
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70352
Type	other
File Information	ARHUA_13_004_p62-65.pdf



< 資 料 >

〔紹介〕北海道帝国大学の奉安所建物について

池上 重康（解説）

北海道大学の歴史の中で奉安所に関する最初の記録が現れるのが、1916（大正5）年に竣工した中央講堂講壇奥に備えられた「御真影奉安所」（図1）である。中央講堂（1916年12月建築、北8条西8丁目所在）は、東北帝国大学農科大学時代の建築であるにもかかわらず「北海道帝国大学予算」として拠出された¹⁾。単独帝大への独立を象徴する建物であり、改めて奉安所を設ける必要があったと理解するのが妥当であろう。

その後、1932（昭和7）年に奉安所は単独の建物となる。同年8月20日開催の評議会において「御真影奉安所ハ前奉安所ニ一大改造ヲ加ヘ単独建物トシテ今般漸ク出来セルニヨリ御承知ヲ願ヒタシ」との記録がある²⁾。言葉通りにとらえれば、従来あった建物を改造したということになるが、この時完成した奉安所は1919（大正8）年建築の本部煉瓦造倉庫の内部に奉安所を新設したものであり、中央講堂講壇奥の奉安所を改修した訳ではない。

ここで、1932年に奉安所となった事務所附属倉庫（北8条西6丁目所在）を顧みておきたい。『北海道大学所属国有財産沿革 本部 十二冊の内其一』（1956年）によると、本部管轄の倉庫として1919年8月31日に煉瓦造平屋建、15坪（約50m²）、3,141円75銭で新築したものである。当時のキャンパス内には組積造（石造あるいは煉瓦造）の建物は少なく、農学部動植物学教室附属^{さくよう}腊葉室（煉瓦造、1902年）、図書館書庫（煉瓦造、1902年）、農学部林学教室標本庫（煉瓦造、1909年）、第二農場の竈場（石造、1910年）と製乳所（煉瓦造、1911年）、サイロ（石造、1912年）の他は、瓦斯製造所と暖房機関室を数えるに過ぎない。組積造は耐火構造物であり、標本や図書類を火災から守る他、日常的に火を使用する建物に、主に採用される。果たして事務所附属倉庫は、そのどちらか。日常的に火を使用しないことは図面から明らかであり、さらに本部管轄の重要な書類等を火災から守ることを目的として建てられたのは間違いない。設計図面（図2）を詳らかに観察すると、扉（出入口）が二つあることに気付く。一つは平側正面中央にある両開きの扉であり、もう一つは右側面に開けられた扉である。いま一つ注視したいのは、平面図の右奥と右下の断面図に描かれる、およそ一坪の小さな部屋が存在である。この部屋は壁で区切られ、側面の扉以外出入りできない。先に引用した「前奉安所ニ一大改造ヲ加ヘ」の記述と照らし合わせると、この奇妙な部屋が奉安所として用いられていた可能性を指摘できる。つまり、当初、御真影は中央講堂に安置されていたが、中央講堂は木造であるため失火焼失の可能性を否定できないので、耐火構造の奉安所を新たに設ける必要があり、この煉瓦造の事務所附属倉庫の一角を奉安所に充てたと推測できる。催事の際には、ここに保管していた御

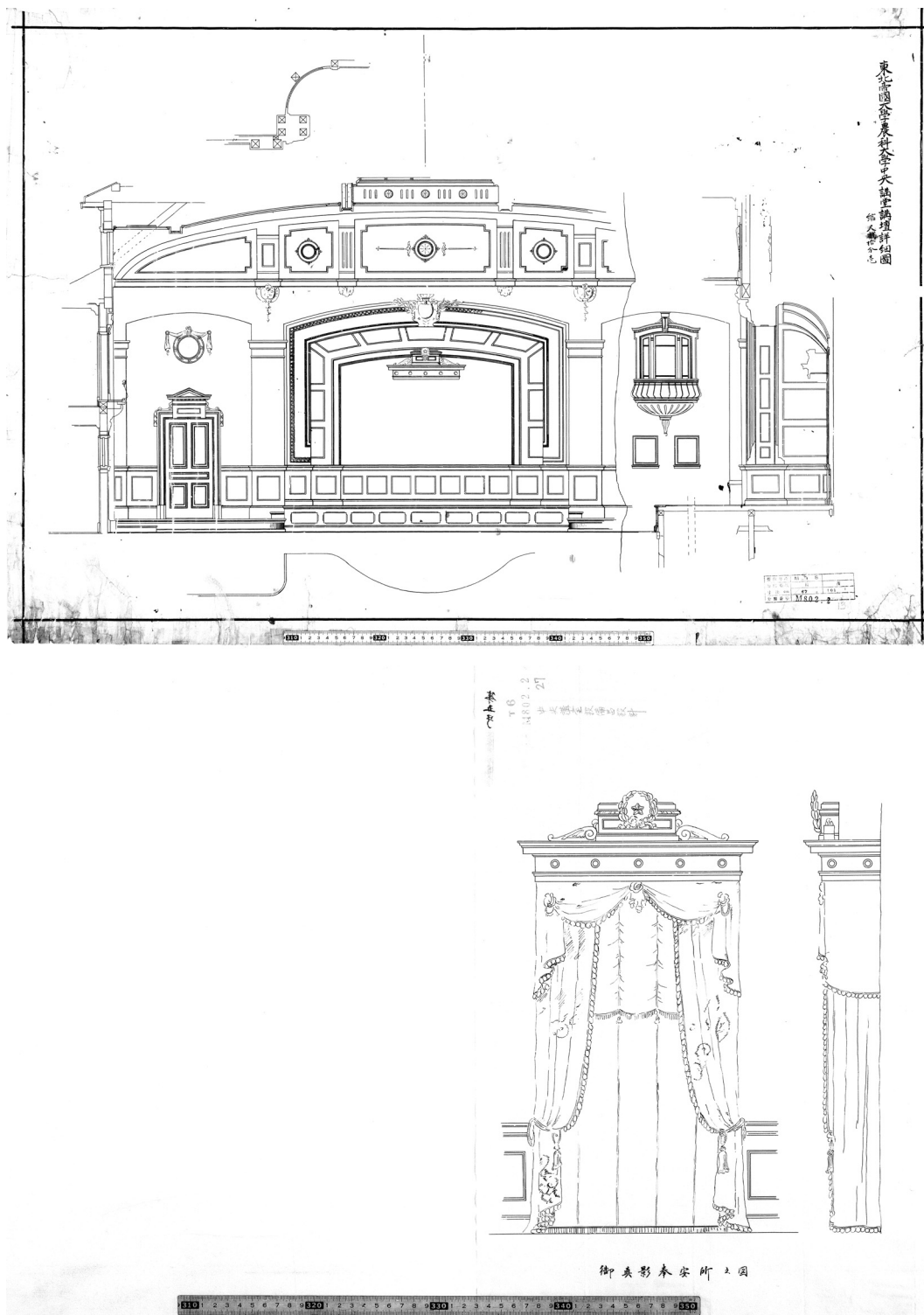


図1 中央講堂御真影奉安所（北海道大学事務局所蔵）

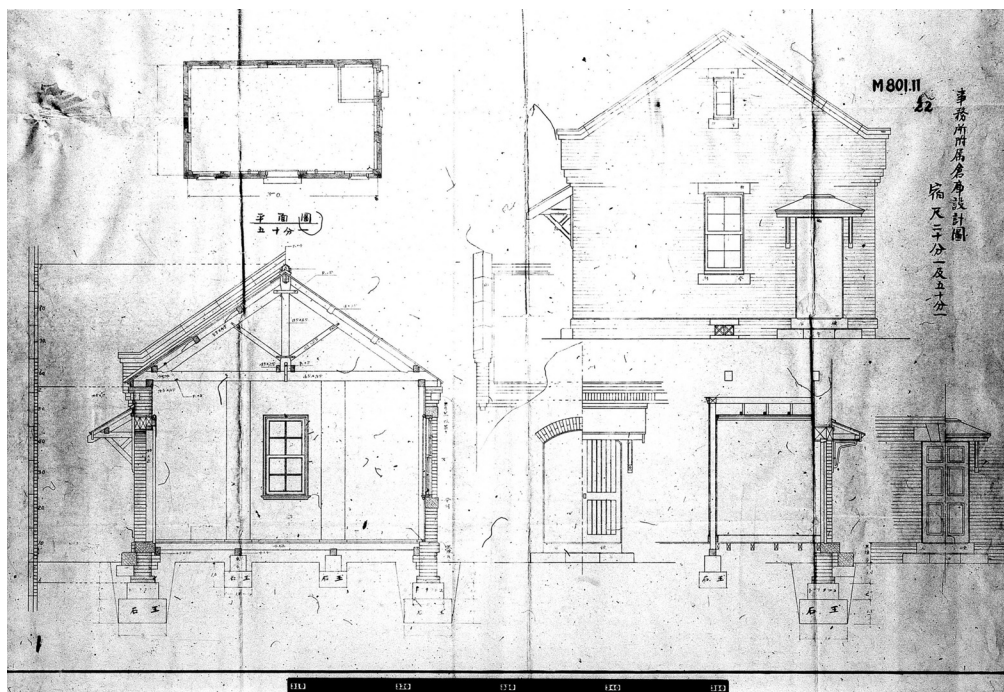


図2 事務局附属倉庫設計図（北海道大学大学文書館所蔵 Aperture card 2017-2846）

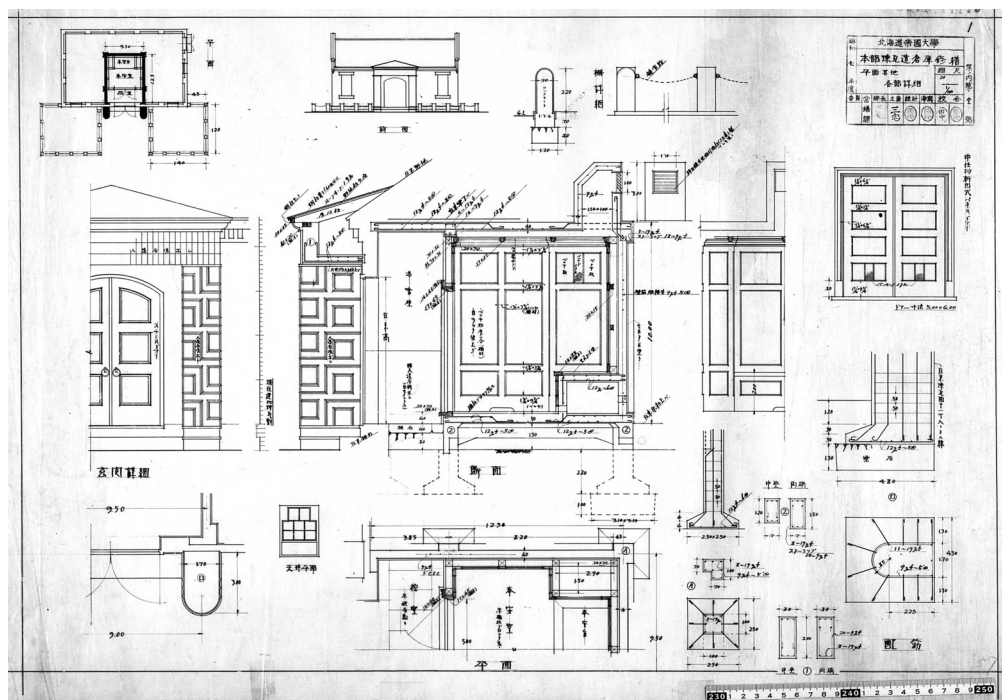


図3 本部煉瓦造倉庫修繕（北海道大学大学文書館所蔵 Aperture card 2015-0046）

真影を中央講堂講壇奥に転置したのである。しかしながら、扉は、図面からは耐火構造とは考え難く、かつ、倉庫内部からの延焼も免れ得ない。火災の際に御真影を守るべく殉職した学校長の話が、当時、度々話題になっていたことから、完全な耐火構造の奉安所の建設が喫緊の課題であったと考えられる。

斯くして、1932年に煉瓦造倉庫に大改修を加え、鉄筋コンクリート製の奉安所が完成することになった。折しも医学部基礎科の研究室が鉄筋コンクリート造で建てられ始めたのと時を同じくする。

それでは、設計図面（図3）から、この工事の仕様を読み解いていきたい。右上の図面表題にある捺印欄から、設計は菊地と読み取れる。当時、北海道帝国大学営繕課に雇として勤務していた菊地彌太郎である。浄写欄にも菊地の印があるので、図面も菊地が引いたということになる。正面前方両脇に12×14尺（36.4×25.5m）の結界を設け、玄関上部には寄棟屋根を掛けた門構えを加える。両袖の壁は半円状に張り出し、人造石洗い出し仕上げの格子状の装飾を施し、楣部分は同じく人造石洗い出しとしながらも芋目地のみを入れる。観音開きの扉は上部を橢状アーチとし、スチール製扉を建て込む。奉安所本体は、天井、壁、床を4寸（12cm）厚の鉄筋コンクリートで覆う。玄関扉から中仕切り扉に至る控室の床のみ硬石（安山岩）を敷き詰める。中仕切り扉や奉安室内の壁および天井は新田式のベニヤ板で装飾されているが、奉安所内部は完全に耐火構造物で覆われている。奉安室奥の奉安台は一段高くしているだけでなく、床スラブが二重構造になっている。更に奉安室の四隅には、独立したフーチング基礎を設けている。奉安所中央の奉安室の床は檜材のブロック張り仕上げで、奉安台床はモルタル塗り、玄関扉と中仕切り扉の間の前室部分の壁は腰から上を漆喰塗り、腰から下を白セメント入り人造石洗い出し仕上げとする。奉安所内部の壁は白ラッカー仕上げなので、窓はなくとも、扉を開け放てば白い壁に光が反射し、御真影を拝むことができたのだろう。

最初に御真影が安置された中央講堂は1964（昭和39）年11月に、奉安所の入る事務局附属倉庫は1980（昭和55）年12月に取り壊された。

〔注〕

- 1）文部省『大正五年度文部省所管歳入歳出予算書』（東北大学史料館所蔵）。
- 2）「評議会記録1 自大正十一年至昭和九年」（北海道大学大学文書館所蔵）。

（いけがみ しげやす／北海道大学大学院工学研究院助教）